

国史跡 北畠具行墓

柏原宿の西、将軍専用の休泊施設であった御茶屋御殿跡付近の交差点を清滝方面に向かい、西の丸山が切れるあたりに西に入る小道があります。その小道を進み登り詰めた猫居坂の峠を少し南へ入ると国の史跡に指定されている北畠具行墓があります。北畠具行は、後醍醐天皇の側近として鎌倉幕府討伐運動に参加。元弘元年（1331）京都の南、笠置山に籠城したが捕らえられ、鎌倉まで護送されることとなりました。その時、護送役であったのが清滝を本拠とし湖北を領していた京極道誉です。道誉は具行が教養の高い優れた人物であることを惜しみ、幕府に助命を願い出でていたがかなわず、鎌倉からの厳命により「海道ヨリ西ナル山際ニ、松ノ一村アル下」『太平記』のこの地で斬首しました。時に元弘2年（1332）6月19日。具行は硯を取寄せて「逍遙生死、四十二年、山河一草、天地洞然」（生死の間をさまようこと四十二年、いま死にのぞんで山河のことごとくあらたまり、天地の万物は空漠としている）と

いう辞世の頌を残してこの世を去ったといいます。

北畠具行墓は総高204cmをはかる砂岩製の宝篋印塔で、「貞和3年丁亥11月26日」（1347）の陰刻があり、具行の死より16年後に介錯をつとめた田児六郎左衛門が建立したと言われています。

今でも毎日の6月19日には、地元の人々により碑前祭が行われています。（桂田峰男）



情報 BOX

◆米原市教育委員会では、下記の図録を作成しました。

『息長氏の遺宝 一山津照神社古墳とその周辺』【A4版14頁 頒布価格200円】

※古代天皇家を支えた名族息長氏とその古墳群を、最新の発掘成果をまじえて紹介しています。

◆市内遺跡活用事業の一環として、下記のパンフレットおよびリーフレットを作成しました。

「米原市遺跡散策マップ1 ~京極氏・大原氏と伊吹山麓の遺跡~」【A3版6ツ折】

「米原市遺跡リーフレット」【A4版 6種類】

※内容は、1京極氏館跡・庭園跡、2上平寺城跡、3弥高寺跡、4太平寺跡、5大原氏館跡・大原音寺跡、6長尾寺跡で、写真と遺構図で各遺跡を紹介しています。

◆埋蔵文化財調査報告書第3集を刊行しました。

『番の面遺跡分布調査報告書 一縄文時代中期の表探遺物一』

※石器作りの集落と考えられている市史跡番の面遺跡で、昭和30年から採集されていた石鏃219点などの遺物の調査を行いました。

◆◆編集後記◆◆

早くも今年度第1号の「佐加太」をお届けします。見開きページには琵琶湖博物館の用田さんから玉稿をお寄せいただきました。米原市の歴史的特性のひとつである山岳寺院についてのご考察です。さて、なぜか感傷的になっている今日この頃の編集者ですが、思い返せば旧坂田郡の文化財情報誌「佐加太」がはじめて世に出たのは1995年3月です。もう13年もたちました。創刊の時には近江の原始・古代史を塗り替えた発掘の数々。四町の担当者が集まっての情報交換と学習会。公民館などでの巡回展の取り組み。庄内式土器研究会などの開催等を経て、さらに、もっと、郡民はもとより、県内外に広く坂田郡の文化財を紹介する目的で本誌の年2回の発行が高らかに宣言されています。嗚呼。あの時の熱い思いに胸踊らせたメンバーは何処。いま残っている2人はあの情熱を絶やすことなく発行していきます。用田さんからの寄稿は、わたしたちへのあたたかいエールにはかなりません（山ノ神）。

米原市文化財ニュース 佐 加 太 第28号

発行 平成20年5月30日
編集 米原市教育委員会
〒521-0292 滋賀県米原市長岡1206番地
米原市教育委員会まなび推進課
TEL.0749(55)8106
印刷 (株)シバタプロセス印刷



佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました

石器を作った縄文のムラ・番の面遺跡

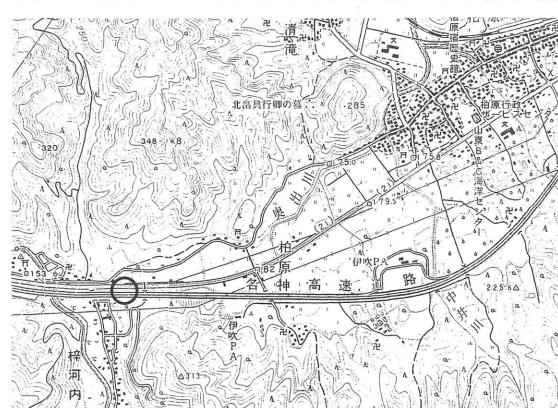
伊吹・靈仙や里山に囲まれ、内湖と琵琶湖に面した米原市は、県内でも最も早く縄文人の営みがはじまった地域です。埋葬された人骨が出土した磯山城遺跡、琵琶湖を周航した丸木舟が見つかっている入江内湖遺跡、甕棺がたくさん出土している杉沢遺跡など、考古学史上著名な遺跡があります。

なかでも、番の面遺跡（市史跡）は昭和30年に発掘調査され、関西で初めて縄文時代の堅穴住居跡が発見されて一躍注目された遺跡です。

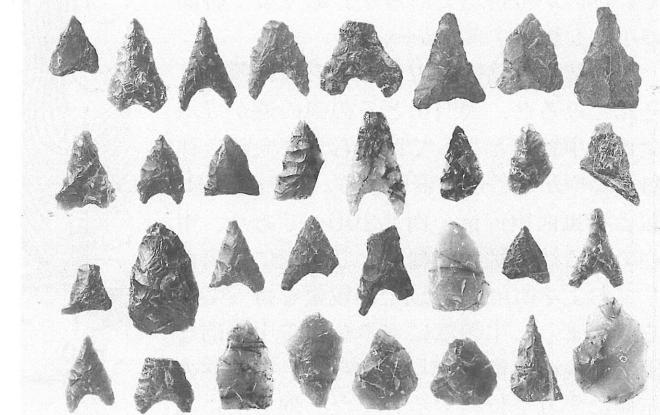
米原市梓河内と柏原の境にあたる、靈仙と清滝山にはさまれた峡谷部の台地上に遺跡はあります。この台地は番の山とよばれ、いまでは名神高速道路と国道21号線によって分断されています。交通網が集中するこの地は、古代の三つの関所のひとつである不破関がすぐ近くにあります。近世には中山道を通り、不破関をぬけた最初の宿場町が柏原で、柏原は日本海地方に至る北国脇往還にも分岐します。西へは醒井をぬけて、琵琶湖岸の朝妻湊から湖上ルートを利用して畿内へ入る経路がありました。このように、この地は主要街道の門戸的な位置にあたり、東西文化の接点として、また政治上、戦略上、常に重要な位置を占めてきました。これは、縄文時代から始まっていることが、番の面遺跡の調査から見えてきました。昭和29年、番の山の畑の開墾で縄文土器の破片30数個が出土しました。京都大学考古学教室

で鑑定され、京都学芸大学（現京都教育大学）により昭和30年7月に発掘調査がおこなわれました。このときの調査で堅穴住居跡が見つかったほか、出土した土器はこの地域を代表する土器型式として「番の面式」と名付けられました。住居跡は、長野県や岐阜県で見つかっているものと構造が似ています。土器も東日本的なもので、番の面遺跡が信濃・飛騨・美濃等との文化的交流をもとに成立していることがわかりました。

さて、梓河内の個人宅には、昭和30年以降遺跡で拾われた石器が約320点保管されています。そのほとんどが石鏃で、石材は青色・黄色・白色、透明・不透明などカラフルな色のチャートです。大きさや形から細かく八種類に分類できますが、これは対象となる獲物や装着する矢の形態の違いによるものだと考えられます。さて、わずかな調査面積にもかかわらず、これだけ多量の石鏃が出土している遺跡は県内には見当たりません。実は、遺跡の近くに良質のチャートの露頭があり、番の面の縄文人はこの石材を利用して石鏃を作り、周辺の村々に供給していたのです。遺跡から石鏃を作ったときのクズが見つかっていることからも、ここが石器作りのムラだったことがわかります。（高橋順之）



▲番の面遺跡位置図



▲番の面遺跡出土石鏃

清瀧寺に見る近世山岳寺院の要素

滋賀県立琵琶湖博物館研究部長 用田 政晴

1 はじめに

かつて筆者が20数年前に調査した、米原市（旧山東町）清滝の谷の最も奥まったところにある宝持坊遺跡は、弘仁年間（810～823年）に開かれたという真言宗豊山派の宝持院に伴う坊跡である⁽¹⁾。

古くから米原市（旧山東町）清滝の狭小な谷部には宝持院など多くの寺院が知られ、佐々木京極家の菩提所で京極家18代の墓所がある清滝寺もその一つである。かつてはこの寺にも12坊があったといわれるが、今日では6坊しか知らない。

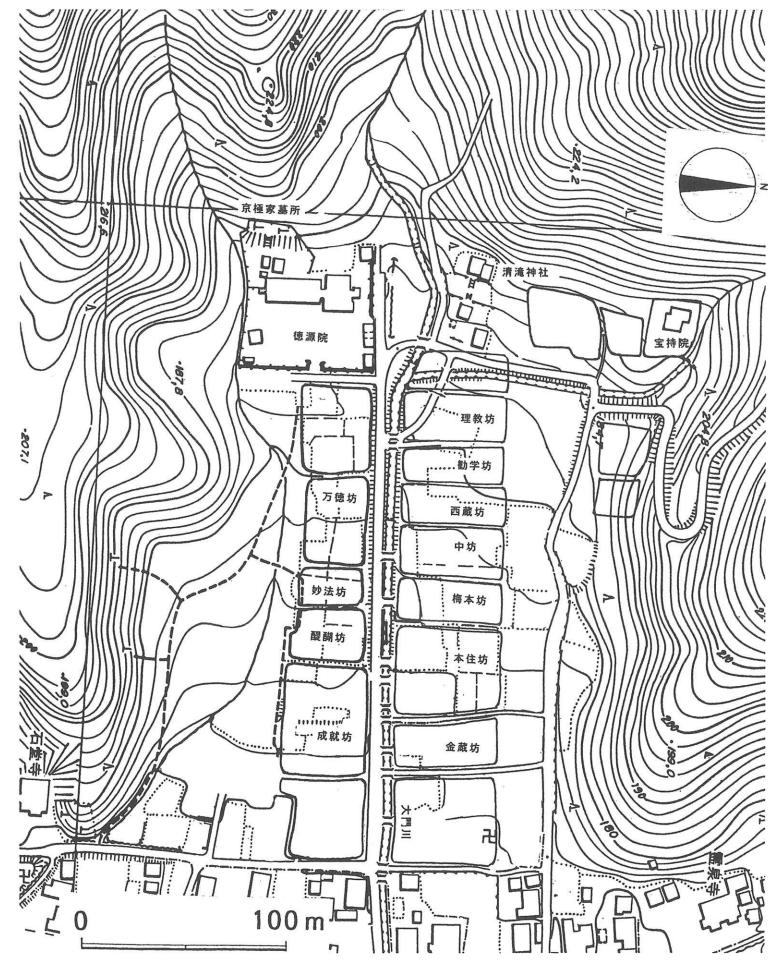
現在、宝持坊として知られている宝持院の北の谷部に連なる郭状遺構からすると、宝持坊のみならずさらにいくつかの坊があったと思われる。また、代々清滝の区長が保管する元禄13年（1700年）の絵図には、寺あるいは坊と思われる建物が鮮明に描かれており、この宝持坊のある谷部にも寺らしい建物を見ることができる。

2 二つの近世山岳寺院

(1) 清滝寺

元禄13年の絵図は、いわゆる天台宗の靈通山清滝寺を表現しており、その中心は現在の徳源院である。京極氏初代の氏信が開基とされ、遅くとも弘安9年（1286年）には開かれていた。後に、寛文12年（1672年）、京極高豊によって再建された際、京極氏歴代の墳墓がここに集められ、現在も京極氏墓所として残っている。その絵図の右上、方位では徳源院の北に位置していたのが宝持坊であるが、あくまで谷間の小さな坊にすぎなかつた。

この清滝寺絵図を現在の地形図に落とし込んでみると、大門川とその南の道が寺域全体の中軸線となって西から東に向かう傾斜の緩やかな谷筋に展開する。その範囲は、およそ東西300m・南北200mであり、中心である徳源院は、軸線より南側に、東面しておよそ60m四方以上の規模を持って在る。つまり、中軸線に本堂がのる中世的な山岳寺院の特徴を有しておらず、中軸線の左側にずれて位置する。また、地形的には



▲清滝寺（『清滝寺絵図』を参考に用田作成）

てみる。

(2) 名超寺

名超寺も天台寺院として知られ、白鳳年中三朱沙門の開基になるという。伊吹山寺の一つで、後に山を下りて現在の米原市朝日に移った大原觀音寺に残る文書によると⁽²⁾、応安2年（1369年）の「伊吹山住山臥衆中連署勝請文」には、山臥の活躍する近江北半を中心とする寺の中にその名が見える。何度かの戦火の後、豊臣秀吉の手により再建され多くの僧坊があったようであるが、現在では觀世院、平等院や円光院跡などが知られるのみである。

寺院跡は、清滝寺とは逆に、東から西に向かって開かれるゆるやかな谷筋に展開する。その谷筋のさらに奥には、權現堂跡と呼ばれる30m四方ほどの寺跡が残る。これが名超寺のかつての本堂跡ともいわれるが、現在ではそこから約200m下った細い谷筋の北側に名超寺本堂があり、その前に觀世院や平等院が建つ。この谷筋は、幅が50m程しかない細いもので、それを貫く長さ約500mの一本の道に、全ての寺跡あるいは坊跡はこの道に面する。しかしながらこの道は、谷筋の南側に偏在しながら、広い名超寺の寺域を貫く点において、極めて近世的な山岳寺院の在り方を残している。

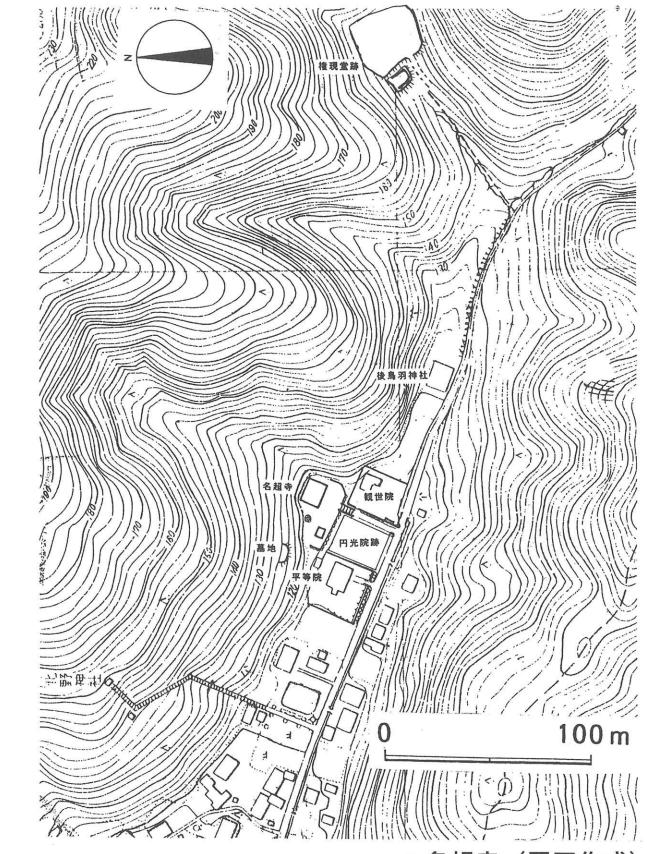
清滝寺と同様に、山からほどんど下ってしまった麓に近い傾斜の緩やかな谷筋に、その平面形において方形の度合いが強い寺跡・坊跡が並び、しかも寺域の中心的な寺は、中軸線上から外れて在ることなどは、山岳寺院の近世的な要素であるといえる。

一方で、中軸線は西向きでありながら、本堂へは南方向から入ること、本堂の左後ろに墓地を備えていることなど、中世以来の山岳寺院の伝統も引き継いでいることがわかる。

3 歴史展開の中での近世山岳寺院

平安時代には二・三の精舎ではじまる山岳寺院は、やがて本堂を中心に尾根上を平面が星形に展開し、中世にかけては一つの尾根に集中して扇形に広がっていく。前者の代表は、長浜市大吉寺や木之本町鶴足寺であり、後者の典型例は米原市上平寺⁽³⁾や太平寺⁽⁴⁾にみることができる。そして、さらに山上で坊が広がり寺域を拡大していくのが米原市弥高寺であり、山上での展開をあきらめて麓に降りるのが、上平寺や大原觀音寺⁽⁵⁾である。

山上で寺域の拡大や寺勢を誇っていた多くの寺院は、中世末には分解して下山する。多くは、かつての坊がいくつか法灯を護るという形で、弥高寺の悉地院のように現在までその名を細々と残す。



▲名超寺（用田作成）

そんな中にあって、近世段階において山を下りた山岳寺院が、麓の谷筋で寺勢を回復、あるいは拡大したのが、清滝寺であり名超寺であった。これらの遺構の考古学的特徴をまとめると、谷筋寺域の頂点左側に本堂が配置され、決して中軸線上にはこない。また、中軸線となった道の両側に一列で坊が配置され、それらは平面形が極めて方形指向であり、しかもその谷筋自体の傾斜は非常に緩やかなものなのであった。

注

- (1) 用田政晴「近世坊跡の一様相－山東町清滝所在宝持坊遺跡の調査－」『滋賀文化財だより』No.92、1984年。
 - (2) 福田栄次郎・神崎彰利校訂『近江大原觀音寺文書』第一、群書類從完成会、2000年。
 - (3) 用田政晴「上平寺城・山岳寺院論の提唱」『佐加太』第22号、2005年。
 - (4) 伊吹町史編さん委員会『伊吹町史』文化民俗編、伊吹町、1994年。
 - (5) 桂田峰男『町内遺跡－大原氏館跡（第三次）・觀音寺遺跡』（『山東町埋蔵文化財調査報告書』X）、山東町教育委員会、1996年。